明38・5）

と正面切っての論争を避け、自らの信ずる方法で作歌をつづけていったから、のっぴきならぬ対立、破局へと進むことはなかったけれども、その危険性も顧みず、平気でそれを言い放つところに左千夫の天真爛漫と言おうか、野人と言おうか、また無神経と言おうか、常人と同じにはゆかぬところがあったのである。

こういう言動のあった左千夫を子規はどう見たのであろうか。左千夫は子規門歌人の最年長者として、入門早々から子規の興津移住のため奔走したり、病室に煖炉を取りつけたり、また虚子、碧梧桐と三人交替で子規の看護当番に当ったりなどして、献身的な尽力を惜しまなかった。子規もそれを多としていたらしいことは彼の書簡や随筆などからよくうかがわれるけれども、そうした生活上のことを離れての評価となると、おのずから別なものがあったようである。子規は興津移住問題に関連して、彼の叔父である加藤恒忠に左千夫を紹介するにあたって、「年は私よりも四五歳の長者にて牛乳業を致居候、教育抔はなき人のやうなれど」（明33・9・24付　加藤恒忠宛書簡）とわざわざ左千夫の学歴にふれているのも子規の左千夫評価と関係がありそうである。

生前の子規が雑誌「大帝国」や「国力」の選歌や「日本附録週報」の代選を委ねたのが、左千夫よりはるか年下で東京帝国大学の学生赤木格堂であったのも子規が教育の有無を考慮したものであろう。

また、「病牀六尺　四十八」（新聞「日本」明35・6・29）で子規が

近眼の人はどうかすると物のさとりの悪いことがある。その原因が何であるとも気づかずに居たが、それは近眼であるためであつた。

と述べているのも、めがねを二つ重ねてかけてもなおよく見えないという強度の近視であった左千夫を念頭に置いたものと考えられ、そこに子規の左千夫評価を見ることができよう。

にもかかわらず、左千夫は子規をひたすら尊敬し、最年長者として根岸短歌会の会員を督励し、結社の興隆に努力する。その次第は、彼がたびたび同人たちに発しているところの

実に先生は偉人だ。ゑらと知つてゐながら、よく知れば知る程ゑらい。之を仰げば愈高、之に臨めば愈深しと云ふは先生などの事だ。吾我はかゝる人と一所に生れ、かゝる人と親炙し、交際して教を受くると云ふことは何たる幸福であろふか。僕は今の世を決して澆季などとは思はい。（赤木格堂宛　明34・4・17付書簡）

とか、また

週報の歌だけは何を置いても先生が見るのである　千載得かたきの人か死になん／＼として猶歌稿を検するを止めすにあるのに何事そや短歌会員なとか悠々として怠慢々々をつゝけつつあるとは　先生なき後に自分免許の駄歌をいくら作ても屁にもなり不申候…君少しく奮発せよ。（長塚節宛　明34・6・15付書簡）

といった手紙によって知ることができる。この文章の行間には、もっぱら子規を尊敬し、根岸派の行く末を憂える熱情があふれている。

こうした点を考えると、鉄幹子規不可並称説のきっかけとなった、「心の華」への左千夫の投書というのも、子規に師事するようになって約半年、ようやく高まってきた子規崇拝の念から行なわれたものであり、それが彼の持ち前の敵愾心の強さから他の結社歌人の攻撃となっていったものであって、興味本位に書きたてて、やはり事件のきっかけを作ったくちあみ（坂井久良岐）の場合とは性格を異にしているのである。

も触れた「あはゆきがたり」と題する投書でも久良岐に対し、

先生の詞によると鉄幹が悪い人間だからとて、其歌まで捨てるなと云ふ様に聞こえますから、先生も鉄幹ちふ奴は悪い人間と認定されて居るに相違ないですが、明治の文壇は明かに汚悪な人間と知れて居る人に製作を要求せねばならぬほど、人間に乏しいのでせうか、よしんば五ッや六ッ採るべき製作があったにしろ、多くの世人が一般に善くない人間としてある人の製作を、何の必要あつて、文壇の問題にするのでせうか（金槌）

と述べている。左千夫の鉄幹や「明星」に対する敵意のほどが、これらの文章によってはっきりわかる。

こうした鉄幹を怒らせるような発言は、ほかにもまだまだ見られるが、その最たるものが、明治三十九年三月、「馬酔木」（三巻三号）に発表した「与謝野晶子の歌を評す」であろう。彼はこの評論の冒頭で「明星」を批判して

概して衒飾偽搆、詞調の軽浮にして内容の幻怪なる、一種の妖気は殆ど真面目なる人として近づく能はざるの厭味を感ぜしむ

と痛罵したのち、「明星」の歌風に大きな影響を及ぼした晶子の歌を七首取り上げて、一々忌憚のない批判を浴びせかけ、彼女の作中でも秀作とされる、

遠つあふみ大河流るゝ国なかば菜の花咲きぬ富士をあなたに

などの歌を

国断てる大河に続く菜の花や菜の花遠に富士の山見ゆ

などのように改作している。これを見た鉄幹は「明星」（明39・5）で

馬酔木左千代氏（ママ）の「与謝野晶子の歌を評す」の一文、かばかり正直に自家の魯鈍を表白せるものは珍し。詩を評せむとならば、せめて日本語だけなりとも修養せよ。

と評して酬いた。このことについて夏目漱石は森田草平宛の明治三十九年五月五日付書簡で、

左千夫が昌子（ママ）を評したのを見て明星で「これほど本人の魯鈍を発表せるものなし」とか云ふて居る。左千夫が見たら怒るよ。元来左千夫なんて歌論抔出来る男ではない。只子規許り難有がつて自ら愚なりたを大事さうに作つて居る。

と許しているが、自己の作風に即して晶子の歌を裁断して、原作の詩趣に全く理解を示さない態度には「明星」派の人々ならずとも、顰蹙を感じるむきが多かったのである。

こういうたぐいの左千夫の発言は、対立する新詩社等、他の流流にばかり向けられたわけではなく、根岸派の人々に対しても同様であった。子規が世を去ったのち、「馬酔木」が創刊され、左千夫が主宰者となるに及んでそうした傾向はいよいよ強まる。その一例として、明治三十八年に「馬酔木」誌上で展開された長塚節との歌の写生をめぐっての論争について見てみると、写生を徹底することによって短歌に新しい境地を拓こうと主張する節に対して左千夫は、

長塚が一首一首の未成品たる作物に安んじてゐるは、彼が頭脳が写生趣味に未だ幼稚であるからである。要するに長塚氏の歌は今のところ、写生的即写生らしひ歌ともなつて居らぬ、写生臭い歌と云ふ位であらう、かうのべつに弁じられては問者も閉口かアハハ、、（「歌譚抄〔上〕」「馬酔木」明38・5）

と高圧的に出ている。節はこのように言われても、

まあじつと見て居て貰ひたい。夏の短夜でも明けるまでは時間がある。○飽きるまではやるのである（「歌譚抄を読みて」「馬酔木」

坊の名で子規の短歌「百中十首」の選をしている。久良岐はそのころ「日本」のほかに、「心の華」に瑞霊の名で「望岳街談」を、また「大帝国」にくちあみの名で「歌壇放言」を連載中で、歌壇のゴシップ等を伝える中でしばしば子規や左千夫のことを話題にしている。先の「書柬一則（藤原久良岐ぬしへ）」は、三十三年五月の「心の華」に掲載された久良岐の「望岳街談（十一）」の趣旨に左千夫が賛同の意を表し、かつ自身の作歌を寄せたものである。

左千夫はまた、久良岐の主宰する七日会歌会にも出席したようで、この年四月七日、久良岐邸で開催された七日会一周年記念会に出席、また五月二十五日には入院中の久良岐を神田の病院に見舞っている。

その後、久良岐が三十四年十二月『珍派詩文　へなづち集』を新星社から刊行すると、左千夫はそれに倣った歌七首を新聞「日本」（明35・3・23）に「嘲屁奈士歌」と題して発表、これは久良岐の『文壇笑魔経』（文星社　明35・5）に収められている。この『文壇笑魔経』には三十五年四月五日の久良岐邸での園遊会に際し左千夫が贈った「珍派園遊会の記（明治壬寅四月五日於瑞霊園）」と題する連作十首も収めている。

また久良岐が三十五年四月、「心の華」（五巻四号）に「三月日記」を発表すると、左千夫は翌号に「あはゆきがたり」を書いてこれを批判、久良岐がそれに「朝雨録」（「心の華」三巻五号）で答えると左千夫は三巻七号に「虚心平気」を書いて反論しているが、その応酬は馴れ合い論争の観を呈している。

このように見てくると左千夫と名良岐とは新聞雑誌への寄稿者同志という関係を越えて個人的な交際をしていたことがわかり、三十三年八月一日に、子規が鉄幹に対して、今後は新派同志で戦うのも快事という例の手紙を送ったとき、鉄幹は左千夫や久良岐の発言を子規の「指嗾」と邪推したのであったが、これも、左千夫は子規の歌の門弟、久良岐は子規と同じ新聞「日本」の記者、しかも左千夫と久良岐が今見てきたような仲で、こうした関係が歌壇に知られておってみれば、鉄幹が推測するのも無理からぬ事情があったのである。

鉄幹子規不可並称説事件は、先述のように、三十三年九月に子規がまず弁明を行ない、久良岐も軽率な発言を陳謝したので、鉄幹もこれを了解、十月には「明星」で先の失言を取り消して、ここに落着したのであったが、左千夫だけは十一月になっても

見よ、注意して見よ、暫く自我を去て虚心坦懐汝が「明星」を見よ、満紙満目邪念紛々として、其自慢傲慢自惚等の製作を拉し去らば残る所幾許ぞ（「歌に就きて吾今日の考〔二〕」「大帝国」明33・11）

と「明星」に対する罵詈をつづけている。そうした新詩社を敵視する態度は三十五年になっても変わらず、新聞「日本」の選歌欄が、選者子規の病状悪化のため、一月から選者が交代し、旧派の作品も採ることになったとき、それに反対する左千夫は一月二十九日の同紙に匿名で投書し、

吾輩は「日本」の意を解するに困む、「日本」は落合や鉄幹や信綱輩の歌に対し猶歌としての価値を認め居るにや、否文学の価値を少くも派別と称する程に認め居るにや、吾輩は「日本」の募集に応ぜんと思へど、小出粲や落合佐々木輩の手に吾作歌を選はしむるを深く辱とする者也（天童投）

と言っているし、また同年五月の「心の華」（五巻五号）所載の、先に

23 奉祝東宮殿下御婚儀歌並短歌（長歌一首反歌三首）　日本　明33・5・10　幸次郎
24 藤花（短歌一首）　日本　明33・5・11　左千夫
25 書束一則（藤原久良岐ぬしへ）　心の華　明33・5・11　左千夫
26 立夏（短歌一首）　日本　明33・5・18　左千夫
27 単骨の人獄談を聴く　日本附録週報　明33・5・28　左千夫
28 芝居（短歌二首）　日本　明35・5・30　左千夫
29 雨中即景（短歌四首）　日本　明33・5・31　左千夫
30 舟中作（短歌二首）　国力　明33・6・2　左千夫
31 曇（短歌三首）　大帝国　明33・6・5　左千夫
32 煙（短歌二首）　日本　明33・6・12　左千夫
33 詠煙歌一首並短歌　日本　明33・6・15　左千夫
34 六月一日四つ木の吉野公園に遊びて（短歌四首）　日本　明33・6・16　左千夫
35 朝鬼夕鬼（短歌六首）　大帝国　明33・6・20　左千夫
36 五月廿五日久良岐君を某邸に訪ひて　大帝国　明33・6・20　左千夫
37 書束一則（麓ぬしへ）　心の華　明33・6・20　左千夫
38 読平家物語（短歌五首＝竹の里人選）　日本　明33・6・24　左千夫

のようになっている。

これを見ると左千夫は子規に入門する前、すなわち明治三十二年の末までに、九回にわたって「日本」および「日本附録週報」に歌や文章を発表している。このほかに彼の文は子規の「人々に答ふ」の「十一」および「十二」に七箇所で引用されているのであるから彼が新聞「日本」にいかに熱心に投稿したかがわかる。

その中には「非新自讃歌論」（明31・2・10）のように物議をかもした投書もある。これは、この年二月七日の「日本附録週報」に、明治聖世の歌壇の盛況を示すため、後鳥羽院が当時の歌仙十六名に自讃歌各十首を奉らしめられた故事にならって有力歌人の自讃歌を掲げるとの前文を付して、その第一回として小出粲の十首が掲載されたのに異議を唱えたものである。左千夫は、この投書において粲の十首を「調の上には少しの味はふべき趣きなく心また雅に高きてふ気韻に乏し」、「ぬしの歌は歌にはあらで三十一文字の俳句なり」と罵倒するとともに、このような「新自讃歌」掲載を企画した記者の徒然坊、すなわち坂井久良岐をも非難している。この投書は御歌所寄人を勤める小出粲の歌を真正面から攻撃したものであっただけに大きな反響を呼び、これを批判する投書が「日本」誌上にあいつぐ状況であった。

この左千夫が明治三十三年にはいって「心の華」にも寄稿を始める。そのきっかけは、この年一月、彼は根岸短歌会への入会と前後して、鶯蛙吟社に入社したことによる。彼の鶯蛙吟社入社は「心の華」三の一（明33・1）の「社告」に入社員として「東京本所茅場町三丁目伊藤幸郎君」とあるのでわかるが、この吟社の機関誌「詞林」は三十二年一月に「歌学会」の「心の華」に合同していたし、さらに三十三年六月には鶯蛙吟社は歌学会と合同して大日本歌学会となり、ここから「心の華」を発行するようになった。そのため左千夫は「心の華」に親近感をもち、自らの著作を自由に発表できる場と考えたものと思われる。しかも、同誌の編集員には彼と同じ根岸歌短会に属し、以前から歌の方で面識のあった岡麓、香取秀真がいた。左千夫が「書束一則（麓ぬしへ）」（明33・6）を投書したのは、「心の華」という雑誌ならびにその編集員岡麓が身近な存在でもあったことによる。

その「心の華」に掲載された一篇「書束一則（藤原久良岐ぬしへ）」（明33・5）を、並称説騒動のきっかけを作った当の二人の人物、左千夫と坂井久良岐との関係を知る手掛かりとして見ておきたい。

久良岐は本名坂井辨。久良岐、くちあみ、瑞霊、徒然坊などとも号したが、明治二年、横浜生まれ。早く渡辺重石丸の門に入り、東京高等師範学校を卒業。当時は新聞「日本」の記者で、三十一年には徒然

きたところを考え合わせると、三十三年ごろになって子規の歌風がようやく固まってきて、それが根岸短歌会の内部にも拡がって定着してゆき、子規を中心に短歌結社としてのまとまりを持つに至ったことを示すと見てよいであろう。

このような時点で、八月一日、子規は鉄幹に例の書簡を送って、今後は文壇の敵同士として争い、陣頭にまみえるという決意を披瀝するのである。

一方の、書簡を送られた鉄幹は、その年の四月、「明星」を新聞型式で創刊したが、これには彼の師の落合直文をはじめ、服部躬治、久保猪之吉、金子薫園など彼と同門の歌人たちが筆を執ったほか、島崎藤村、薄田泣菫といった詩人も寄稿した。詩歌のほかに、短篇小説、評論、翻訳等も収載したこの雑誌は青年層の心を捕え、九月発行の第六号からは瀟洒な四六倍判の雑誌型式に体裁を改めるほどの成功を収めていた。

明治三十三年八月一日付で発せられた与謝野鉄幹宛の子規書簡は、右のように新派短歌結社の中で最も目覚ましい活動を示していた新詩社に対して、ようやく新派結社としての実質的なまとまりをもつようになった根岸派から送られた先陣争い、または覇権争いのための挑戦状であって、この鉄幹子規不可並称の争いは、その後、稔りある展開を見ることなしに終わりはしたけれども、和歌革新運動、ならびに根岸短歌会の発展の歴史から見るとき、一つの記念すべき出来事であったのである。

以上で「鉄幹子規不可並称説」問題全体についての考察を終えたのであるが、ここで最後に、この問題の発端を作って、事件に深くかかわった伊藤左千夫について、人間論とでもいった側面から見ておくことにしたい。

周知のように、左千夫が子規に入門し、根岸短歌会に出席するようになるのは明治三十三年一月のことで、それ以後、彼の短歌制作は活発になり、新聞や雑誌への発表も多くなるのであるが、しかし、それ以前にも彼はかなり頻繁に歌や文章を発表している。いま、それを「書束一則（麓ぬしへ）」という例の投書を彼が「心の華」に寄せた三十三年六月までに限って掲げてみると、

1 建白書（元老院宛）明14・2・？ 伊藤孝次郎
2 貨幣之差異ニ付キ伺（千葉県令船越衛宛）明17・9・？ 伊藤孝次郎
3 学校合併ノ議ヲ弁駁ス（武射山辺郡長杏崎省吾宛）明17・12・20 伊藤幸二郎
4 小隠子にこたえ 明31・2・10 伊藤春園
5 非新自賛歌論 明31・2・23 24 伊藤春園
6 日本新聞に寄せて歌の定義（ママ）を論ず 明31・3・7 伊藤春園
7 題知らず（短歌二首） 明31・4・6 春園
8 非地租増徴論 明31・11・28 伊藤幸次郎
9 当陽川村某といふ人に物申さん 明32・1・11 茅のや楽人
10 楽人漫言 明32・2・20 茅廼舎楽人
11 接木（俳句一句＝碧梧桐選） 明32・4・20 楽人
12 内地雑居の営業的準備 明32・5・29 伊藤幸次郎
13 詠矢刺浦歌一首並短歌三首 明32・8・14 伊藤さちを
14 象山先生の書 明32・8・21 諜堂
15 新年雑詠（短歌二首＝竹の里人選） 明33・1・1 伊藤さちを
16 肺病なる人の妻にかはりて（短歌二首） 明33・2・11 伊藤左千越
17 森（短歌三首＝竹の里人選） 明33・2・12 伊藤左千夫
18 麓が家にて（短歌二首） 明33・4・11 伊藤左千夫
19 春雨（短歌三首） 明33・4・13 左千夫
20 桜花（短歌十八首＝竹の里人選） 明33・4・26 左千夫
21 鎌倉懐古 明33・5・6 左千夫
22 小金井遠乗（短歌六首） 明33・5・7 左千夫

けになった横浜菊迂生の投書が「心の華」に載った明治三十三年の五月、一箇月間を例にとって、探ってみると次のようである。

○五月六日、子規庵で根岸短歌会開催。子規、一五坊、格堂、興安嶺、左千夫、三子、潮音、茂春が出席。子規は、この歌会での参加者の詠草十六首を「五月短歌会」と題して新聞「日本」に掲載。

○十三日、子規、「日本」に歌論「竹里歌話」の連載を開始（六月九日、十八日の三回で完結）。

○十四日、子規、「日本」に歌論「万葉集を読む」の連載を開始（五月二十一日、六月十一日、七月三日の四回で完結）。この記事は四月から始まった万葉集輪講会での討議をふまえて執筆されたもの。

○二十日、子規庵で万葉集輪講会開催。輪講会のあと、根岸短歌会の臨時歌会となり、子規、一五坊、格堂、左千夫、三子、潮音、茂春が参加。この歌会での参加者の詠草十八首は「国力」（明33・6）に「根岸草廬臨時歌会々稿」として掲載。歌会は深夜に及び、雨となったため、一五坊、格堂、左千夫、茂春の四名は子規庵で歌について話して一夜を明かし、翌二十一日は早朝から再び歌会を開き、この朝訪れた麓も加わり、「雨中即景」十首、「煙」十首、旋頭歌等をめいめいが作る。

○三十日、子規、「日本」に「芝居の巻抄」を発表。これは根岸短歌会の会員が歌会のほかに郵便を利用して短歌の回覧互選を行なったもの。毎月、課題に応じて出詠者が十首の詠草を幹事のところへ郵送すると、幹事はそれを作者名を伏せて冊子に清書し、また郵便で出詠者の間を回覧する。各人はその冊子の歌の中から十首の佳作と、その中の最高の作（天位）とを選んで幹事に報告するとともに冊子を次の出詠者に回送、回覧がすむと幹事はその成績を集計し、天位、佳作のそれぞれの作者ならびにその歌をとった者の氏名を発表し、もう一度順に回覧するというもので、この月の課題は「芝居廼巻」、潮音が幹事となり、子規、潮音、一五坊、煙村、格堂、興安嶺、左千夫、三子、秀真、安民の十名が出詠している。五月三十日の新聞「日本」に掲載された「芝居の巻抄」は、このときの入選作に子規が批評等を加えたもの。なお、五月四日、六日の両日、子規は四月に行なった「歌の巻」を記事にして「鎌倉懐古の巻抄」と題して「日本」に掲載。

以上が並称論の騒ぎが起こる直前である、明治三十三年五月一箇月間における、子規を中心とした根岸派歌人たちの主なる活動である。これを見ると、重い病いの床に就いていた子規ではあったが、その子規を中心に、作歌に、研究に、またそれの新聞、雑誌への発表に、いかに熱意を燃やしていたかを知ることができよう。

後年、岡麓が書いた、左千夫を追悼する文章、「友達の軸であった」（「アララギ」十二の十　大8・10）には、この三十三年五月の中ごろ、麓が「根岸座座付役者番付」というものを作り子規に見せたところ、子規もこれに応じて番付をこしらえて麓に送ってきたことが記されており、その文中に子規の作ったという番付表が

麓　—塩谷判官

秀　真—勘　平

左　千　夫—高　師　直

といった具合に示されている。

このように、明治三十三年になって子規や麓によって「根岸座座付役者番付」がこしらえられるようになったということは、今まで見て

方で打ち立てた、感情の表出を抑えた写生の方法を、そのまま短歌の制作に応用しようとする見解を改めている。

こうして子規は短歌においては、単に対象を視覚的に描写するだけでなく、作者の感情も含めて表現することを考えるようになるのであって、明治三十三年の作である、「菊」と題する

我庭にさける黄菊の一枝を折らまくおもへど足なへわれは

菊の花咲けらく見れば草つゝみ病める心のさぶしくもあらず

などの歌では、病気のため菊のそばに立つことのできぬ無念の思いや、彼が特に愛した菊に寄せる思いがはっきり表出されている。

子規はまた翌三十四年五月には「しひて筆を取りて」と題する十首からなる連作を発表する。そこに収められた歌は

佐保神の別れかなしも来ん春にふたゝび逢はんわれならなくに

などのように行く春を惜しみ、自らの生命を愛惜する感慨が主情的に詠嘆されており、この一連は斎藤茂吉が『子規短歌合評』（昭23・3青磁社）において「作者一代の傑作」と評するところのものであるが、この「しひて筆を取りて」十首は先の「菊」に見られた抒情的傾向の延長線上にあるものと言えよう。

このように、子規が明治三十一年ごろに行なっていた、俳句で悟入した写生の方法をそのまま持ち込んだところの作歌方法は、三十三年ごろには後退し、以後、抒情性を加味した作品が見えてくるのであるが、しかし、彼は同時に先の坂井辨宛の書簡においても、先の引用部分に引きつづいて

乍併俳句に詠みたる趣味は尽く短歌に適せずと申には無之、少くとも其半は短歌にも適し不申候。若し又、俳句に用ゐたる材料のみに就きていはゞ十中の八九迄短歌にも用ゐられ不申候。

と述べており、感情の表出を抑えて、対象を視覚的に描写する写生歌もやはり作っている。そして、その中には

冬ごもる病の床のガラス戸の曇りぬぐへば足袋干せる見ゆ

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

松の葉の葉毎に結ぶ白露の置きてはこぼれこぼれては置く

などのように、一首としての完成を見せ、子規の代表作とすることのできるものが多くなり、三十一年ころのような、俳句をそのまま歌の世界に移したような、歌としてのまとまりに欠けるような作品は姿を消してゆく。

いま見てきたように、明治三十三年にはいって子規は「ガラス窓」十二首や「庭前即景」十首などのように彼の写生歌を代表させることのできるような作品を生むに至ったが、同時に彼は作歌経験を積むにしたがって短歌の詠嘆性にも気づいて、「菊」十首や「長塚節へ」などのような感情の流露した歌を詠むようになるのであって、このころになって子規の歌風はようやく定着を見たと言えよう。

次に、このように自らの歌風を定着させた子規の指導のもとに開かれた根岸短歌会について見てゆくと、子規庵で岡麓、香取秀真らの歌人が参加した短歌会が初めて催されたのは明治三十二年三月十四日であったが、そののち月々に行なわれた歌会で自信を深めた子規は、その年の末には新聞「日本」に「短歌を募る辞」を掲げ、広く結社の外にも呼びかける。そして、この短歌会には三十二年には赤木格堂、柘植潮音ら、三十三年には伊藤左千夫、長塚節らが新しく加わって、出席者の顔ぶれがだんだん固定してゆく中で、会員たちによって歌会のほかに「万葉集輪講会」や、「歌の巻」の回覧互選が始められる。

ここで、当時の根岸短歌会の活動の様子を、並称論の騒動のきっか

9）や「国詩革新の歴史」（「心の華」明33・9）を書いて非難するに至った契機となったのは、八月一日に鉄幹に宛てた子規の手紙だったのである。

では、そのような重要な契機となった書簡を子規がこの時期に書いた理由は何か。

それを考える手掛かりとして、問題の明治三十三年前後の根岸短歌会内部の状況を改めて詳しく見ることにすると、俳句革新の運動に成功した子規は、三十一年ごろから短歌のそれにも意欲を示し、俳句で悟入した写生の方法を短歌にも移して実行しようとする。すなわち、

歌は俳句の長き者、俳句は歌の短き者と謂ふて何の故障も見ず、歌と俳句は只々詩型を異にするのみ。（「人々に答ふ」「日本」明31・5・3）

ということばに見られるような短歌俳句同一視の考え方の上に立って、写生句ときわめて近似した短歌を作ってゆくのである。その一例として、三十一年の作である

椽先に玉巻く芭蕉玉解けて五尺の緑手水鉢を掩ふ

の歌を見てみると、この一首は、芭蕉を眺める作者の内面を直接表出することを避けて、ただ鮮やかな色彩感、位置関係、立体的な構図といった絵画的な写生の方法によって対象をとらえたものであるが、松井利彦氏が「日本近代文学大系16」の『正岡子規集』などで指摘しておられるように、子規には

庭を覆ふて芭蕉の巻葉とけにけり

巻葉とけて庭に塞がる芭蕉哉

という、先の短歌と同じように巻葉の解けた芭蕉の様を写した俳句があるのである。

もう一首、やはり明治三十一年の作である。

日をうけて覆盆子花咲く杉垣根そのかたはらよ物ほしどころ

という歌を見てみよう。この歌の場合も、杉垣のもとのいちごの花を見る作者の感情は直接歌われてはいない。ただ、杉垣のそばに物干し場がつづき、その下の方にいちごが植わっていて、白い花をつけていると、物と物との位置関係を的確に示して、立体的な構図で眼前の景を描いた写生歌であるが、これと同じ手法は

蒲団干す下にいちごの花白し

の句でも用いられているのであって、この句も、干してある蒲団と、その下に咲くいちごの花とが、立体的構図をもって描写されている。

このように子規は俳句を作るとき用いていた写生の手法を短歌においても利用して、身辺の日常的な風物を主なる素材にして、その歌の上の句だけを読むと、そのまま俳句になるような絵画的な歌を作っていたのであるが、明治三十三年ごろになると、作歌の体験が重なるにつれて短歌と俳句を同一視する見解を改める必要に気づいたようである。その一例として、三十三年三月十八日付の坂井辨に宛てた子規の書簡を見ると、

一昨年と今年と少しく考の変りたるは、短歌は俳句の如く客観を自在に詠みこなすの難き事、又短歌は俳句と違ひて主観を自在に詠みこなし得る事、此二事に候。一昨年頃は俳句に詠み得る景色は何にても三十一文字に入れ得べきやうに信じ候ひしかども実際経験を積むに従ひ短歌は俳句の如く軽快なる微細なる景色を詠み難きを発明致候。

と言っており、短歌の抒情性、詠嘆性を発見、彼がそれまでに俳句の

明治三十三年の六月ごろには、鉄幹と子規とは、互に新派歌人としてその力を認め合い、友好的な関係にあったといってよいのである。

しかし、このような鉄幹と子規との調和的な関係も、三十三年の中ごろから崩れてしまうのであって、先にも触れたように、八月一日には子規が鉄幹に書簡を送って、「或は明星の味方として拙稿を投ずる事を止め御互に文壇の敵同士として喧嘩する方面白からずや存じ候」と新詩社と文学的な対決をしてゆく決意を示し、「明星掲載の歌に就きては小生共の友人の中には随分議論も有之候」と根岸派歌人の中に新詩社の歌風に対してかなり反発のあったらしいことをのぞかせている。

それに対する鉄幹の方も、子規の八月一日付の例の書簡を「子規子来書」として掲載した「明星」第六号(明33・九)の「文芸雑俎」欄で

かの頑迷固陋なる旧派歌人は問ふこと勿れ、近時新派と称する人々にして、万葉集の詩風に擬して、自ら得たりとする者あるは、われの怪怪に堪へざる所なり。何ぞ進んで諸君自らの詩を発明せざるや

と述べて、根岸派短歌の万葉集を模倣する擬古的な傾向を批判している。このような態度は、同じ「明星」の六号から掲げられるようになった「新詩社清規」にも見えており、その第二、三、四条を見ると

一、われ〳〵は東西古人の詩を愛読す。されど古人の開拓せる地に、更にわが鍬を入れんことは、われらの元忍びぬところなり。

一、われらは互に自我の詩を発揮せんとす、われらの詩は古人を模倣するにあらず、われらの詩なり、否、われら一人一人の発明したる詩なり。

一、われらの詩は国詩と称すれども、新しき国詩なり。万葉集、古今集等の系統を脱したる国詩なり。

と、新詩社の目指すところが万葉集等の模倣ではなく新しい詩の創出にあることをくどいほどに繰り返して強調している。

明治三十二年十一月に結成された新詩社はその規則を「明星」創刊号の十ページに摘要の形で、また第二号の十四ページには「本号より本社規則を改むること左の如し」としてその全文を、それぞれ掲載しているが、そのいずれの場合も、専門詩人以外に和歌および新体詩を研究する団体で与謝野鉄幹を社幹とする旨を述べている程度であるのに、明治三十三年九月刊行の第六号から、いま見たように万葉集などの模倣を排して独創を宗とすることを三箇条にもわたり謳っているのは、子規の主宰する根岸短歌会の万葉集尊重の態度に反発してのことと見られる。そしてこの第六号以後は「文芸雑俎」欄には子規や根岸短歌会に関する記事がほとんど姿を消すのである。

こうして見てくると鉄幹が「明星」第六号(明33・9)を境に、それまでの根岸派に対する友好的な態度を改めて対決の姿勢をとるようになったことは明らかである。

このように鉄幹が態度を変えたのは、彼が「明星」第六号所載の「子規子に与ふ」で述べているように、「心の華」に載った左千夫の独善的な投書や、くちあみの興味本位の記事の奥に、八月一日付で鉄幹の新詩社に対して今後対決してゆくことを宣言した子規がいると推測してのことと考えられる。左千夫やくちあみの文章によって感情を昂ぶらせた鉄幹は、八月一日の子規の手紙を読んで、彼が左千夫やくちあみをそそのかして書かせたと考えたのである。

繰り返しになるが、鉄幹が左千夫やくちあみの記事を単なる彼らのはねあがりによる偶発的な事件としてはとらえず、誤解とはいえ、それを子規の「指嗾」によると判断、「子規子に与ふ」(「明星」明33・

にすると、「心の華」への左千夫の投書などがきっかけとなって、両派の間に対立が強まるが、それまでは新派同志の連帯感とでも言うべきものがあって、むしろ友好的であった。

鉄幹は先掲の「国詩革新の歴史」の中で、明治二十六年の夏に鮎貝槐園とともに松島に旅した際、槐園がやはり当地を訪れた子規に会ったことを話題にしている。この話は、鉄幹と子規とがそこで直接会ったという点での確実性にいま一つ欠けるようであるが、明治二十六年二月のあさ香社結成に参画し、直文らとともに作品を新聞「日本」に発表していた鉄幹が、二十五年十二月に「日本」新聞社に入社して翌年春から俳句の革新にとりかかった子規を意識していたことを示している。

鉄幹と子規の直接的な関係で最も早い時期のものとしては、子規が鉄幹の著書に序文を書いたことが挙げられる。すなわち、明治二十九年七月に刊行された鉄幹の処女詩歌集『東西南北』に子規は序文を贈って

余も亦、破れたる鏡を撃ち、錆びたる長刀を揮うて舞はんと欲する者、只其力足らずして空しく鉄幹に先鞭を着けられたるを恨むと、鉄幹と同じ和歌革新の意欲を見せている。

つづいて、その年の秋には鉄幹らの発起で新体詩の研究会「新詩会」が結成された。それには鉄幹のほかに、落合直文、佐佐木信綱、大町桂月、宮崎湖処子らが参加したが、子規もこれに加わって、九月五日、上野三宜亭で開かれた会合に出席し、翌三十年三月に同文館から刊行されたところの合同詩集『この花』に「おもかげ」ほか七篇の詩を載せている。

この新詩会に関連して言えば、今日、封筒を欠いていて日付は不詳であるが、

折にふれてものし出でつるこの六七首、分らず、句といふものになれりや否や、子規兄、ねがはくば、よきにひき直し給ひてよ

鉄幹

と書かれた、自作の俳句の添削を子規に依頼した鉄幹の書簡があって、このころの二人の仲をうかがわせるが、これは新詩会でいっしょに会合をもった二十九年ごろの通信かと推定される。

ついで、明治三十三年になって新詩社から「明星」が刊行されると、子規はその第二号（明33・6）には歌論「雄略帝の御製」を載せている。これに対して鉄幹も、第二号では「歌壇小観」の中で「子規子の近作で僕の面白く感じた中の一つ二つ」として彼の短歌五首を紹介し、第三号になると同じ欄で

○「日本」に正岡氏の歌論が屢々あらはれる。氏の熱心は今更吹聴する迄もないがどうか一人でも多く真面目に読む人があれば善いと祈ることである。

○落合先生も佐々木氏も議論は下手だから、創作ばかりで頓と奇抜な議論がない。一昨々年の夏正岡氏が八たびまで「歌人(ママ)に与ふる書」を公にして以来、氏が歌論は我々未熟な者の窃に重しとして居る所で、氏の外には坂井瑞霊、服部躬治、八杉貞利の二三氏が折々歌論をする。

などといった具合に鉄幹は子規を和歌革新運動の中心的な人物と視ており、この号の「歌壇小観」欄では全四十五項目中、十二項目で子規のことに触れている。

このように見てくると、左千夫が問題の投書を「心の華」に寄せた

革新に乗り出した。その年、身近の俳人たちと作歌を試みたが、翌三十二年二月には岡麓、香取秀真らの歌人が加わって歌会が開かれ、ここに根岸短歌会が成立する。この短歌会には、翌年、さらに伊藤左千夫、長塚節らも加わり、このメンバーによって万葉集輪講会も始められて、同短歌会は三十三年から三十四年にかけて、子規在世中で最も活発な活動を展開する。

当時の歌壇において新派に教えられる主な結社としては、いま述べた新詩社と根岸短歌会のほかには竹柏会、いかづち会などがあった。このうちの竹柏会は、佐佐木信綱が父弘綱のあとを継いで明治二十四年から主宰するようになったもので、三十一年には雑誌「心の華」を創刊し、新派和歌運動に関心を示したが、父弘綱や高崎正風の影響を受けたこともあって新旧折衷の微温的傾向を帯び、「ひろく、ふかく、おのがじしに」という標語を掲げて、自身では明確な指導方針を示すこともせず、革新的な色彩をそれほど鮮明にはしなかった。

一方、いかづち会は落合直文門の久保猪之吉、服部躬治、尾上柴舟らによって明治三十一年に結成され、旧派を攻撃して、詠草を「読売新聞」に発表、歌文の革新を目ざしていたが、翌三十二年に同じ直文門の鉄幹が新詩社を結成して活発な活動を繰り広げるに及んで「いかづち会」の会員の中から「新詩社」の会員に席を移す者が出て、その影を薄くしていった。

このように明治三十三年ごろには、いかづち会の活動は活発さを失ない、一方また、竹柏会は会員数は多かったが、新旧折衷的性格をもち、新派としての旗幟は鮮明でなかった。こうして、活発な新派和歌運動を見せていたのは、前年に結成され、この年四月に機関誌「明星」を創刊した、鉄幹の主宰する新詩社と、前年には歌人たちによる歌会を、そしてこの年には万葉集輪講会を開いて、ようやく活動が軌道に乗ろうとしていた、子規の主宰する根岸短歌会の二つであった。

ここで両派のそのころの発表手段について触れておくと、まず新詩社は、今述べたように明治三十三年四月に「明星」を創刊。この雑誌は最初はタブロイド判の新聞型式で、啓蒙的色彩の濃いものであったが、同年九月発行の第六号から四六倍判の詩歌中心の芸術雑誌の体裁に発展し、読者を増してゆく。

これに対して根岸短歌会は、当時まだ独自の機関誌を持たず、その詠草や文章は新聞「日本」や、雑誌「心の華」「大帝国」などに発表している。「日本」は子規が同紙の記者をしていた関係によるものであり、「心の華」が純然たる竹柏会の機関誌となるのは、これよりのちの三十八年の一月からで、それまでは新旧を問わず各派に門戸を開いて、歌壇の総合雑誌といった性格をもっていたので自由に寄稿することができた。この雑誌は三十二年六月には鶯蛙吟社の「詞林」と合併しており、鶯蛙吟社の会員であった岡麓、香取秀真、大橋文之の三名は、合併後、「心の華」の編集に参加していたが、この三名は同時に根岸短歌会の会員でもあった。こうした事情から機関誌をもたなかった根岸派の歌人たちは、子規をはじめ、左千夫、節、格堂らが歌や文章をしばしば同誌に持ち込んだのである。また「大帝国」は明治三十二年六月に博文堂から創刊された月二回刊行の政治経済評論の雑誌であるが、短歌にも比較的に誌面を割いた。子規と親しかった坂井久良岐がくちあみのヘンネームで「歌壇放言」欄を担当していて、その関係であろうか、子規の推薦で格堂が同誌の歌壇を担当することになり、子規をはじめ、根岸派の歌人たちが作品を寄せている。

ここで再び明治三十三年ごろの新詩社と根岸派の関係にもどること

岐）に対しても

歌に対せる評言の外、人物等に関する小生の評言を新聞雑誌へ御掲載無之様奉願候

と注意した。すると久良岐も鉄幹に対して子規の手紙を示して、子規が歌学上の争いをしようというほかに他意のなかったことについて理解を求め、また自分の執筆した「歌壇放言」は子規の意向とは全く無関係に書いたものである旨を弁明、鉄幹に不快の念を起こさせた軽率をわびたので、鉄幹もこれを了解した。

その結果、鉄幹は十月七日に根岸の子規庵を訪問し、子規に対して誤解による失言のあったことを陳謝し、「明星」七号（明33・10・12）に

小生は爰に子規君に対する明星第六号紙上の失言を謝し、且つ同時に公にせる、心の華紙上の子規君に対する評言をも取消し申候。

とその心を明らかにしたので、事件は急転直下解決を見ることになった。

「心の華」の雑報子は、三巻九号（明33・9・20）においては、先に引用したとおり、「両子の論戦いかばかり花々しからんぞ、刮目して見む」と論争の発展を期待したのであったが、次の十号（明33・11・8）においては、「ボヤ程にもなくて、人騒がせに終りし道行は知るを得べし。」と失望を隠さなかった。あっけない幕切れとなったのである。

それでは、この対立は単なる「人騒がせ」にすぎなかったのであろうか。この事件が近代短歌史の上でもつところの意義について考察するため、まず、この事件の起こった明治三十三年前後の歌壇の状況を、新詩社と根岸短歌会に焦点を置いて眺めてみることにしたい。

すこし時間はさかのぼるが、明治二十六年に落合直文はあさ香社を結成し、和歌改良の端緒を開いた。この門から与謝野鉄幹、金子薫園、尾上柴舟、服部躬治らの歌人が輩出するのであるが、直文自身の歌は新旧折衷の域をそれほど出るものでなかったため、その後の短歌革新運動の主な担い手となったのは、直文に学んであさ香社の創設にも参加した鉄幹であった。その後を追うようにして、すでに俳句革新の運動に成果を挙げ、短歌の革新にも意欲をもつようになった子規が登場する。

そのうち、まず鉄幹の方について見ると、彼は明治二十七年に「亡国の音」と題する歌論を「二六新報」に発表して、旧派の和歌を否定し、気宇高大で男性的な歌を作るべきことを主張、実作としても詩歌集『東西南北』（明29・7）ならびに『天地玄黄』（明30・1）を刊行した。憂国慷慨の「ますらをぶり」「虎剣調」の鉄幹の歌は、日清戦争後で国家主義思潮の高揚していた当時の青年層の心をとらえ、彼が新派和歌運動の先頭に立つようになり、こうした気運の中で明治三十二年には新詩社を結成し、翌年四月、その機関誌として「明星」を創刊する。そして、同誌の二号から作品を発表するようになった鳳（与謝野）晶子の奔放で情熱的な短歌は「明星」の歌風に決定的な影響を及ぼし、この雑誌は青年子女の間に圧倒的な人気を得て、新派和歌運動の中心としてさらに大きな勢力を占めるようになるのである。

一方、子規の方は、鉄幹よりやや遅れて、明治三十一年、「歌よみに与ふる書」を新聞「日本」に発表して、古今集の歌を排して万葉集をよりどころとし、理屈によらずに見たままを写生の手法によって歌に詠むべきことを主張し、また同紙に実作「百中十首」を掲げて短歌

その僕と名を列べて書かれるのは嫌やだといふことは、文壇の徳義を無視した常識はずれの無礼の暴言ではないか」「この開書を以て正面から君に一打撃を加へるのである。文壇の礼儀作法を知って居る君であるなら、左千夫や坂井に書かせずに、君自身の名で子規は文壇の破廉恥漢でないと云ふことを弁明し玉へ。兜を脱いだの、後輩の鉄幹など云ふことは、和歌革新の歴史上、君が健全なる頭脳である以上は、断じて僕に向って云はれた義理ではあるまいと思ふ」と強く抗議し、陳謝を要求した。そして「心の華」三巻九号（明33・10・4）には、談話「国詩革新の歴史」を発表して、短歌革新運動に先鞭をつけたのは子規ではなく鉄幹自身であると主張した。

同じ「心の華」三巻九号の「雑報」欄で雑報子は、子規が八月一日に鉄幹に宛てて書を送って戦いをいどむ決意を明らかにしたこと、これに対して鉄幹が「明星」に「子規子に与ふ」の一文を発表して陳謝を要求したことなどを紹介、「両子の間の論戦は愈々開始せられぬ。（中略）嗚呼これより両子の論戦はいかばかり花々しからんぞ、刮目して見む。」とセンセイショナルに報道し、「倶楽部」欄にも子規、左千夫、整々子、日本橋下生、陸奥雲廼舎らが意見を発表、子規と鉄幹との対立をめぐる「心の華」誌上の議論は、このころ最高潮の観を呈するに至る。

なお、先掲の「心の華」三巻八号の「倶楽部」欄に載った「笹の里人」の投書や、「心の華一記者」の「竹の里人に与ふる書」、また「明星」六号に掲載の鉄幹の「子規子に与ふ」などが、そろって左千夫の発言を子規の指嗾によるものと推測したのに対して、当の左千夫は「心の華」の三巻十号と十一号に「歌に就きて吾今日の考」と題する文章を発表して、

正岡氏何の必要ありて吾輩を指嘱する　吾輩又何の必要ありて他の指嘱を受けて云々すべき　馬鹿〳〵しき邪推にも程こそあれ　苟も風流を楽て文筆の間に悠遊する者の胸間に起るべき想像ならんや

と左千夫の先の投書が子規とは無関係に行なわれた旨を弁明するとともに、鉄幹が「明星」で暗に根岸派の万葉集の模倣を批判し、新詩社の独創の尊重をしたのについても

われら一人一人の発明したる詩なり、などゝは畢竟出たらめの寝言に過ぎざるのみ　既に三十一文字の形式を襲踏しるにあらずや

と反撃を加えている。

このように、左千夫や久良岐の発言をきっかけにして起こった、明治三十三年の鉄幹子規不可並称説の騒動は、雑誌「心の華」や「大帝国」などに書き立てられて人々の注目を集めたのであったが、九月になって子規は論争が興味本位に受け取られることを心配して鉄幹に書簡を送って、真意の誤解されたことを説明した。その手紙は

明星第六号の御書面拝見致候これに対して御答申上度存候へど書面にては意を尽さず人づてにては愈々真を誤らんを恐る成るべくは御面会の機を得て申上度候　一言申上置候は貴兄が小生に対する攻撃は『邪推』と『誤報を信ぜらる』との二事より起り候様相見え候

九月十六日　　正岡常規

与謝野寛殿

というものであった。

子規は、また、問題の「歌壇放言」の筆者「くちあみ」（坂井久良

発言を行なっている。

このような、「心の華」の三巻六号、七号に載った左千夫の投書に対しては、さっそく八号に反響が現われる。「倶楽部」欄には、まず冒頭に「編者」の名で、

○倶楽部は表題の如く倶楽部に外ならず候まゝ編者はもとより其説に賛否を表して掲載と否とを決するものには無之勿論清濁を区別することも無之候

と弁明しているほかに、「瑞霊」「笹の里人」「服部躬治」「神田山のいたゞき」「遠方生」の五名が、左千夫の投書について意見を寄せている。その中の「笹の里人」の投書を見ると

君の標準にあはぬから直に歌に非ずといふのは酷論だと思う延て文学的価置がないというのも一家言に止まる事と信ずる（中略）所謂標準論と所謂標準にかなったお歌とをこの誌上で発表して下さらぬか

と左千夫の独善的な発言を批判し、また「遠方生」は、左千夫は「心の華」という雑誌をいかなる性格の雑誌と心得ているのかと非難するといった具合で、五人の投書者の意見は、いずれも左千夫の態度に批判的である。

このように「心の華」誌上で、左千夫の投書をめぐってやかましい論議がなされた明治三十三年八月、子規は鉄幹に一通の書を送る。これは子規が門下の赤木格堂に口述して筆記させたもので、その書面は

（前略）若し小生が原稿を書く丈の勇気快復致候暁の事を考ふるに或は明星の味方として拙稿を投ずる事を止め御互に文壇の敵同士として喧譁する方面白からずやと存じ候　是迄は新派を一団として旧派に抵抵する必要も有之候へども旧派声をひそめて事実上太略降服したる今日は新派同士の喧譁こそ必要と存じ候　明星掲載の歌に就きては小生共の友人の中には随分議論も有之候　事故之を幸に陣頭に相見ゆる機と致し度その方が歌学界の為めにも宜しかるべきかと存じ候　尤に敵同士と相成候とも場合によりて拙稿御掲載相願ひ候かも知れ不申候へども兎に角両派に別れて歌戦するも快事と存じ候　右御参考迄申上候

という子規の指導する根岸派が新詩社に対決することを宣言した挑戦状であった。

すると、このことを「くちあみ」（坂井久良岐）が「大帝国」三巻五号（明33・9・5）の「歌壇放言(一)　新歌界の新消息」で取り上げ、

「○根岸の短歌会から、此間鉄幹に向って開戦状が発せられた」「近頃鉄幹が『明星』を出して、ソロ〳〵大風呂敷を拡げ始めたが、これも要するに中学生徒の餓鬼大将たるに過ぎないのである」「然るに世間では、非常に鉄幹を買被って、歌壇の名物男の如くに云ふ明盲もある。」「鉄幹も万更自分を知らない男ではないから、其一目も二目も三目も置いてゐる子規子に対しては、疾くに兜を脱いでゐるのである、子規子とてモトより後輩たる鉄幹などをイヂめる精神はないのである・が」などと興味本位に伝えたから、鉄幹の激昂を招くこととなった。

怒った鉄幹は「明星」六号（明33・9・12）に例の子規からの手紙と並べて「竹の里人に与ふる書」を掲載し、

どうも此頃の君等一派の素振を見ると、君が指嗾して伊藤左千夫や坂井くちあみ等に、あのやうな暴言を放たしめるのかと思はれる。

と左千夫、くちあみ等の言動は子規がそそのかしたものと推定して、

「君とは私交もある僕だ、君には十分文壇の礼譲を尽してゐる僕だ、

31論　戦　心の華　三の一　明33・11・8（雑報子）
32（倶楽部欄投書）心の華　三の一　明33・11・8　嶽北迂人
33（倶楽部欄投書）心の華　三の一　明33・11・8　名古屋月下滴露生
34硯　南香北　大帝国　三の一　明33・11・20　鉄幹・石城・豊珠
35消　息　心の華　三の一　明33・11・20（雑報子）
36（倶楽部欄投書）心の華　三の一　明33・11・20　三河国片浜人
37墨　汁　一　滴　日本　一　明34・1・25　正岡子規

のように多くの、それに関する記事が見られる。

これを見ると、当時、この事件がいかに歌壇において人々の関心の的となったかを知ることができるのであるが、本稿では、この事件の経過の概略を紹介してこの事件の近代短歌史の上でもつ意義に触れたあとで、伊藤左千夫がこの事件に関して果たした役割を彼の人柄の問題とからませて検討してゆきたい。

ここで、まず先掲の子規の回想に至り着くまでの経過をかいつまんで紹介すると、鉄幹子規不可並称説問題は明治三十三年五月、「心の華」（三巻五号）の「倶楽部」欄に「横浜菊迂生」なる者が

○毎号の撰者に与謝野鉄幹正岡子規渡辺光風金子薫園なんどの新派若武者をして乙課題の方を分担なさしめ本誌の本領を明らかにせられむことを祈る。

という投書を寄せたことに始まる。

これを読んだ伊藤左千夫は、同誌の編集に当たっていた岡麓に宛てて、右のような投書を掲載したことについて抗議の手紙を送ったが、その手紙は六月の「心の華」（三巻六号）に

○前略　三巻五号の倶楽部のうち与謝野、正岡、渡辺、金子の新派云々とある　かくの如き不埒なる投書を掲ぐるは甚よろしからぬことゝ存候（左千夫）

のように掲載される。左千夫はさらに翌月の同誌（三巻七号）にも長文の投書を行なって、

正岡師と他の両三氏を一列に見るさへあるに若武者なんどゝ稍軽侮の言を弄せるにあらずや

と横浜菊迂生の投書が子規を鉄幹らと同列に置き、「若武者」呼ばわりしたのは非礼であると改めて抗議する。そしてこの投書ではさらにこのような投書を「心の華」に掲載したのは、それを編集者が是認したに等しい、同誌の編集者には岡麓、香取秀真という二名の根岸短歌会の会員がいるにもかかわらず、このような投書が採用されたことは遺憾であると注意を喚起している。左千夫は続いて根岸派と、鉄幹、光風、薫園ら他の新派との相違について、

吾々にして新派と云ふべくば彼人々は旧派なるべし　彼人々にして新派なりと云ふべくば吾々は何か外のものなるべし　彼人々の作歌を見れば今日の所徹頭徹尾吾々と一致すべからざる所あるなり　彼人々の歌と吾々の歌とは其標準に於て根底より相違して居るといふことを断言するのである

と、根岸派と他の新派とでは志向するところが根本的に相違し、一致することは不可能であることを述べて、自身の属する根岸派を宣揚する。そしてそのあと筆の勢いはさらに激して、落合直文、佐佐木信綱、久保猪之吉、服部躬治という四名の新派歌人の歌を掲げた上で、

以上所掲の数歌の如きは吾々は見て以て歌とはせざるなり　文学たる価値を認めざるなり　其巧拙を云ふべき程度に迄達せざる物と断じて疑はざる物なりとす

と、歌としての価値を全面的に否定する、きわめて独善的で挑発的な

根岸派と明星派の対立

―人間左千夫の関与―

貞　光　威

An Opposition between the Negishi School and the Myojo School

正岡子規は新聞「日本」に連載した「墨汁一滴」において、明治三十四年一月二十五日、

去年の夏頃ある雑誌に短歌の事を論じて鉄幹子規と並記し両者同一趣味の如くいへり。吾れ以為へらく両者の短歌全く標準を異にす、鉄幹是ならば子規非なり、子規是ならば鉄幹非なり、鉄幹と子規とは並称すべき者にあらずと。乃ち書を鉄幹に贈って互に歌壇の敵となり吾れは明星所載の短歌を評せん事を約す。蓋し両者を混じて同一趣味の如く思へる者の為に妄を辯ぜんとなり。爾後病牀寧日少く自ら筆を執らざる事数月未だ前約を果さゞるに、此の事世に誤り伝へられ鉄幹子規不可並称の説を以て尊卑軽重に因ると為すに至る。然れども此等の事件は他の事件と連絡して一時歌会の問題となり、甲論乙駁喧擾を極めたるは世人をして稍々歌会に注目せしめたる者あり。

と述べている。ここに子規が言うように、明治三十三年の夏から秋にかけて、いわゆる「鉄幹子規不可並称説」の論争がわが国の歌壇に起こっており、当時の新聞・雑誌には、管見に入っただけでも、

1（倶楽部欄投書）心の華　三の五　明33・5・20　横浜菊迂生
2書束一則（麓ぬしへ）心の華　三の六　明33・6・20　左千夫
3（倶楽部欄投書）心の華　三の七　明33・7・20　伊藤左千夫
4望岳街談（其十四）心の華　三の八　明33・8・20　瑞霊
5（倶楽部欄投書）心の華　三の八　明33・8・20　編者
6（倶楽部欄投書）心の華　三の八　明33・8・20　瑞霊
7（倶楽部欄投書）心の華　三の八　明33・8・20　笹の里人
8（倶楽部欄投書）心の華　三の八　明33・8・20　服部躬治
9（倶楽部欄投書）心の華　三の八　明33・8・20　神田山のいだゞき
10（倶楽部欄投書）心の華　三の八　明33・8・20　遠方生
11歌壇放言（一）大帝国　三の五　明33・9・5　くちあみ
12子規子来書　明星　六　明33・9・12　正岡常規
13子規子に与ふ　明星　六　明33・9・12　与謝野鉄幹
14子規と鉄幹と　万朝報　一　明33・9・16　△△△
15竹の里人に与ふる書　心の華　三の九　明33・9・20　心の華一記者
16国詩革新の歴史　心の華　三の九　明33・9・20　与謝野鉄幹談話
17子規子と鉄幹子　心の華　三の九　明33・9・20　（雑報子）
18（倶楽部欄投書）心の華　三の九　明33・9・20　竹の里人
19（倶楽部欄投書）心の華　三の九　明33・9・20　伊藤左千夫
20（倶楽部欄投書）心の華　三の九　明33・9・20　整々子
21（倶楽部欄投書）心の華　三の九　明33・9・20　日本橋下生
22（倶楽部欄投書）心の華　三の九　明33・9・20　陸奥雲栖舎
23（倶楽部欄投書）心の華　三の九　明33・9・20　―
24投げ文　大帝国　三の七　明33・10・5　紫郎
25歌壇放言（二）大帝国　三の七　明33・10・5　くちあみ
26蛇口仏心　明星　七　明33・10・12　正岡常規・坂井辨・与謝野寛
27歌に就きて吾今日の考（一）大帝国　三の八　明33・10・20　左千夫
28歌に就きて吾今日の考（二）大帝国　三の九　明33・11・5　左千夫
29辨惑一則　大帝国　三の九　明33・11・5　くちあみ
30子規と鉄幹　心の華　三の〇　明33・11・8　（雑報子）